

葬送儀礼(葬儀)について 1

仏教とはそもそも釈迦牟尼仏(お釈迦様)の教えのことで、それぞれに理解して広めたのが日本の各宗派の始祖である。

仏教伝来は6世紀であるが、一般の人々にまで定着したのは徳川の時代である。

徳川幕府がキリシタン弾圧のために行った「寺請制度」のためである。

全ての民はどこかの寺に帰依しなければならず、死者が出ると幕府の代わりとして僧侶が出向き死体改めを行った。

後にこの名残りが枕経となった。

仏教徒となった証が戒名・法号・法名である。

本来は仏の教えを守る、戒律を守る約束をするのが戒名であって常日頃から寺院とお付き合いをし、生前に戴くものである。

寺の造営に寄与したり社会的に貢献した人に与えられるのが院号である。

普段から寺院との関わりもないのに戒名、院号を欲しがり、高い、安いを言うのは本来のことではない。

ただ、戒名の授受に金銭が伴うのはおかしいことであり、布施、喜捨としてでなければならない。

仏式で葬儀を行なう以上、仏教に帰依してもらいその証として戒名を授ける。

葬儀のために戒名を授かるのではなく、戒名を頂いて仏教徒となったので葬儀は仏式で行なうというのが本来の形なのです。

戒名は中国が起源で古くから「諡(おくりな)」の習慣があった。

功労のあった人に朝廷からその人の死に際して贈られる名のことである。

日本では養老律令(天平時代 藤原不比等)に記述がある。

「その人の一生は自分自身の責任によるものであり、その人の評価は他人が下す」

諱(いみな)、忌み名という言葉もあるがこれは仏教ではなく民間信仰(宗教的習慣、迷信など)である。

戒名を授かる理由としてよくこの諱、忌み名が取り上げられる。

この中に属する言霊信仰に死後に生前の名を呼ぶと死者の魂が戻り災いが起きるなどと最もらしく言われているが仏教とは関係ない。

日本で初めて戒名を受戒したのは、天平勝宝6(754)年に聖武天皇で「勝満」、光明皇后は「満福」

檀信徒すべてに戒名がつけられるようになったのは前述のキリシタン弾圧政策の江戸時代以降である。

聖武天皇に見るように文字数は二文字であり鎌倉時代に禅宗が伝わった頃から四字戒名が出現した。

禅宗の僧侶と同じく道号二文字と戒名二文字が合わさったものを室町時代の武士がつけるようになった。

院号は戒名ではないので戒名の位を表すとする現代の考え方は間違いである。

院は「四角に区切られた場所」という意味でしかない。

冒頭に述べたように戒名に院号が付く場合は寺院を寄進した人のみである。

香は線香が主流となっているが本来は抹香を薫じた(香は焚くのではなく薫じると言います)

伽羅が最も高価で沈香、白檀が続く。

香典は元々、香を買うための金銭が包まれたことが名の由来である。

香資、香料も同義語である。

蠟燭は仏の知恵を表すことと魔を払う意味があり灯明が正しい呼称である。

花も本来の形から少しずつ変わってきてしまった。

枕経で使われる本来の花は一本花である。

お釈迦様の般涅槃(はつねはん)、入滅された時の故事に由来する。

(お釈迦様の入滅を十大弟子の一人が一本花を持った人に教えられた)

この一本花には死者の霊を憑依させるためとされ、二本だともう一人死者が出ると言われている。

枕机の花は一本にするのが本来である(櫛を使ってもかまいません 一本櫛)

花が多い時は机の脇に置くようにするのが良い。

白菊の花言葉は「ご冥福をお祈りします」というのも覚えておきたい。

告別式は本来宗教を含まない。

明治に入り告別式の言葉を用いたのは中江兆民であった。

告別式では宗教は含まず別離のみを行なうものとされてきた。

葬儀とは別なものである。

※葬儀とは葬送儀礼の略語

葬列といえば野辺送りの葬列が連想される。

大正4年に東京に初めて霊柩車が登場する。

宮型と称する霊柩車の形は野辺送りの時の神輿を車に載せたものだ。

葬儀の曲友(かねとも) 札幌

<http://kanetomo.2lala.net>

曲友(かねとも)